様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 13 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19520421
研究課題名（和文）英語における動物比喩の総合研究：その歴史・構造・ジャンル

研究課題名（英文）An Extensive Study of Animal Metaphor in English: Its History, Structure, and Genres

研究代表者
渡辺　秀樹（WATANABE HIDEKI）
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：30191787

研究成果の概要（和文）：
英語の動物名で人間比喩義を持つものを類ごとに全て収集・リスト化し、イヌ科、ネコ、鳥類、昆虫の人間比喩用法、代表的詩人の動物名使用の特徴について研究論文を発表した。本研究では動物名の縁語も含めて人間比喩用法における動物名の類義・対義のグループや複雑な構造性を明らかにしたが、このメタファーの構造性の提示が本研究の成果であり学界でも注目された。その成果は既に日本英語学会全国大会シンポジウム「これからのコロケーション研究」の講師として口頭発表し、今後『英語動物名メタファーの構造と歴史』（仮題）という学術書に記す。

研究成果の概要（英文）：
This four-year study is an attempt to extensively collect the metaphoric uses of English animal terms and to clarify the structural nature of those words. The two researchers have published 20 articles on “animal metaphor in English,” presenting many intertwined relations among animal names together with their hyponyms and related words when they are metaphorically used. As for case studies, they also discuss symbolic and metaphoric uses of animal terms in Shakespeare and Milton. Based on the intensive studies of canine, feline, avian, and entomological terms, their arguments throw light on several aspects of synonymity and antonimity among English animal names hitherto unnoticed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：歴史言語学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：メタファー・直喩・動物名・語義拡張・認知言語学・歴史的変化・構造性

１．研究開始当初の背景

近年メタファーに関する関心が高まっており、英語学においては認知言語学の知見である概念メタファー理論に基づくメタファー研究が盛んである。認知言語学の専門家のメタファー研究は、個々の言語メタファー表現の解釈や個性的用法を論じるのではなく、言語メタファーを証拠に思考そのものがメタファーに基づいていることを論証しようとするものである。概念メタファー理論は説得力のある説明原理であるが、この分野の多くの研究者が自身で思いついた用例を用いて論を進めており、実際に使用された例を用いていないことに対する批判があった。

メタファーに対しては古くから関心が持たれており哲学・文学・語学において様々な研究例がある。過去の文献学的なメタファーの研究は、作家や作品ごとのメタファーの例の収集、そして現れた特徴への言及という形態をとる事が多かったが、概念メタファー理論研究者は、こうした先行文献にはほとんど関心を払わない。理論の説明のために提示されたメタファーの用例が、作家や作品ごとのメタファーの先行研究文献、特に文学的研究者のより類例と共に詳細に分類されて説明されていることもあるが、参照されていない。文献学的研究の分野では、特定の時代の諺集、直喩表現集とともに作家や作品ごとの植物名や動物名の用例を集め作家や時代がどのような事柄に関心を寄せていたかを解明しようと努めたものがあるが、こうした研究も時代遅れとして省みられなくなった。

一方で、コンピュータを用いて分析可能な大規模コーパスを使って用例を大量に集める統計的研究が広まっている。この種の研究を行う者は、集めた大量の用例を数値的に処理することに大きな労力を注ぎ、それらの使用文脈をじっくり観察することはない。そもそもメタファーの用例を大規模コーパスからコンピュータで集めることが難しいのは、言葉の字義通りの使用ではないからである。

メタファー研究についての、狭窄視野的なこの状況を打開する必要があった。

２．研究の目的

「英語における動物比喩の総合的研究：その歴史・構造・ジャンル」においては、英語の文献学の研究者が認知言語学専門家と共同研究グループを組織し、メタファー用例の判別と収集を文献学・英語史の知識を基礎に行い、集めたメタファーの用例を類義や対義のグループに分け、構造性を考察する際に認知言語学における概念メタファー理論に則って行う、この理想的連繋研究を目指した。

研究代表者と分担者は英語学の研究者であるが、これまでそれぞれ古英詩と近代英詩を論考の主たる対象としてきたため、共同で研究することで英詩について歴史的に通観することが可能になる。両者の共通の興味の対象である Shakespeare については、そのメタファー使用を多角的に論じ（登場人物名比喩・動物名比喩・賞賛と罵倒の比喩・感情表現の比喩表徴など）、本研究の軸とした。

最終的に目指すのは、英語の動物名の人間比喩用法を類語・縁語と共に観察して、「狡賢い人」「かも・阿呆」「可愛い女」「がり勉」などの同じ比喩義を持つ動物名や「捕食者と獲物」「親分と子分」など対義関係にある動物名の辞書的リストを作成すること、及びそれらの類義と対義のリストや用例の文脈考察から、英語の動物名の比喩義の複雑な構造性を図式モデルとして表示することである。

同時に各時代の英語詩人のメタファー使用の特徴を論じ、英詩のメタファー使用の伝統や継承についての問題再提起を目指した。

３．研究の方法

(1)英語の動物名の人間比喩の用例を幅広く集めて、人の性質や行為を表す比喩義の一覧を作成、それを基にメタファー辞書を作る。
(2)哺乳類・鳥類・魚類・虫・爬虫類といった動物の類毎に集めた人間比喩用法を比較考察して、類義・同義の動物名を抽出、類似の比喩義が生じた原因と類似性を説明する。
(3)比喩義成立の過程を歴史的に説明付けるために、中世英語を視野に入れ、特に成句・熟語・俚言が頻出する頭韻詩のメタファーを同時に研究、イディオム研究の出発点とする。
(4)*Beowulf*, Chaucer, Shakespeare, Milton, Wordsworth といった各時代を代表する英詩や英国・米国詩人のメタファー用例を収集し、まず動物名の使用の特徴や伝統について考察し、動物名と感情表現の関係や、登場人物名と動物名の関係等も広く考察する。
(5)上記の研究の各部門を論文にまとめ、それを編集・相互参照を行い「英語動物名メタファーの構造と歴史」（仮題）という研究書にまとめる。

４．研究成果

4 年間の研究成果を分野ごとに述べる。
(1)学会の口頭発表に関しては、研究代表者の渡辺は国際英語史学会(SHELL) 第 2 回大会（2007 年 9 月　於名古屋大学)、第 3 回大会（2009 年 9 月　於広島大学）において、それぞれ古英詩 *Beowulf*における 1 節を取り上げて、語句の比喩義と字義の使用について文体的効果の観点から論じた。日本英語学会全国大会シンポジウム（2009 年 11 月　於大阪大学）「これからのコロケーション研究」においては、「英語史とコロケーション」のテーマを論ずる講師に招聘され、連語の観点から動物名比喩の歴史性と構造性を示した。日本英文学会第 82 回全国大会（2010 年 5 月於神戸大学）においては古英詩 *Beowulf* の日本人の研究を総括するシンポジウムを企画し、その司会と総論を担当した。

分担者大森は感情表現を四大と動物表徴から考察した研究成果を日本認知言語学会第 8 回大会（2007 年 9 月　於成蹊大学）において「感情が形づくる心の風景：“a flood of joy”型メタファー表現に見る写像の特性」という口頭発表で示し、以後これは他の研究者に参照される概念メタファーの型となった。
(2)代表者と分担者は動物メタファーに関する論文を毎年度 2 本以上発表し、これまでに英語の鳥名・昆虫名・イヌ科名詞・ネコ科名詞について論考した。英詩のメタファーの通

史的考察に関しては、代表者は Shakespeare の登場人物名の比喩用法を既に論文で発表しており、本研究においては詩人の動物名比喩を構造性の見地から考察し、特定作品の概念メタファー分析を行った。分担者は米詩における動物名と感情表現の関係、及び Milton の *Paradise Lost* における動物表徴について論文 3 本を発表した。これらは今後出版を予定している学術書の各章を構成する。

(3)共同研究の副次的な成果としては Alice Deignan, *Metaphor and Corpus Linguistics* (2005) の日本語翻訳書（2010 大修館書店）を出版したことである。本書は認知言語学で提唱された概念メタファー理論を実際に使用された英国現代英語のコーパスで検証したものだが、論じられた用例には 16 世紀英詩や動物関係の語句も多く含まれており、歴史的研究者の渡辺と認知言語学者大森の共同研究で翻訳が可能となった学術書である。

(4)本研究で到達した英語動物名の比喩義の構造性について要約して述べる。

本研究に先行する科研費補助金を受けた 3 年間の研究において、研究代表者は既に古英詩から連綿と続いて用いられる動物表徴に気付き、特に捕食者と獲物、親分と手下という組合わせが、複数の動物関係で繰り返し人間関係の比喩として用いられてきたことを述べた。ごく簡略に示せば下図のようになる。

ボス 大物	手下 小物	捕食者 詐欺師	獲物 カモ
lion	jackal	wolf	sheep
	coyote	fox	goose
wolf	dog	dog	rabbit
over dog top dog	bottom dog	cat	canary
		owl	mouse
		rook	pigeon
		vulture	fowl
		shark	fish

こうした関係を複雑にしているのは、人と馴染み深い dog と cat が他の複数の動物名と様々な対立関係をなしている事実である。猫 cat を見れば、屋内のペット canary を餌食にして食べることが頻繁に観察されたため “cat and canary”「危ない関係」を示す頭韻句として成立、屋内の害獣鼠を捕まえる益獣としての猫は “cat and mouse”という成句となった。さらに人に身近な犬とは敵対関係を成し、“cat and dog” 「仲の悪さ」を原義とするメタファーであったが、両者が一家に共存していることから「喧嘩しながらも仲の良い夫婦」にまで比喩義は拡張している。

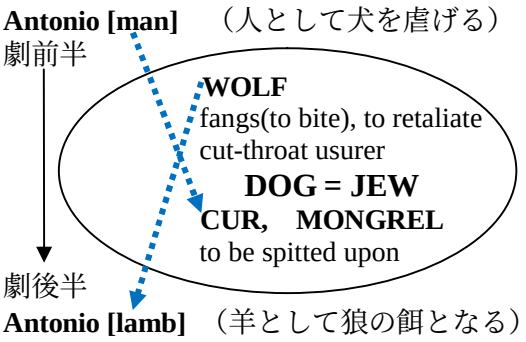
こうした複雑な動物名の比喩義の関係をメタファーの観点から説明した研究は内外に全くないことが分かった。これが本研究を思い至った先行研究での到達点である。

本研究では人間比喩義を持つ英語動物名を全て収集し、魚類・爬虫類・昆虫類・鳥類・哺乳類と類毎に比喩義のリストを作成し、類内にはそれぞれ類似の人間関係を示す動物名の組み合わせがある事を明らかにした。

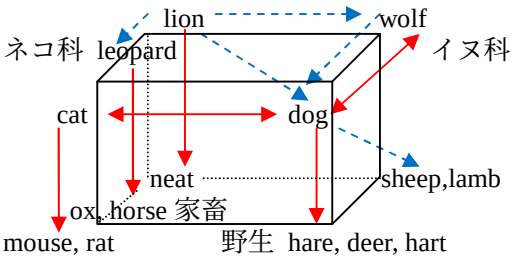
特定詩人のメタファーの考察も英語の伝統の中の独創と考えられる。Shakespeare, *The Rape of Lucrece* においては、武将の妻を凌辱する王が捕食動物、貞淑な妻が獲物として様々な組合わせで出現する（Tarquin vs Lucrece: owls, wolves vs lambs; night-owl vs dove; falcon vs fowl; cockatrice vs white hind; night-waking cat vs weak mouse)。さらには上位者と下位者の間の准上位の存在までも動物名で表されることが明らかとなった。

	鳴禽・小禽	猛禽	獣
上位者	lark, nightingale	eagle	lion
准上位者 凡庸	wren	kite, buzzard	leopard
下位者	crow, goose	crow, raven	dog

he Merchant of Venice におけるユダヤ人金貸し Shylock と商人 Antonio の関係も、多出するイヌ科動物名と縁語から Shylock をイヌ科の様々な動物と比較する概念メタファーを想定すれば、両者の関係が劇前半と後半で逆転していることが明示される。このように文学作品内での動物名の使用を概念メタファーで説明した論文はこれまでにはない。



本研究では動物名称間の複雑な構造性を理想化モデルとして図式に示すことに成功した。親分対子分、捕食者対餌食、家畜対野生、つまり支配（点線矢印）・捕食（→）・対立（↔）3 系を持つ下の立方体構造である。



５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計２０件）
①Ayako Omori, “Conventional Metaphors for Antonymous Emotion Concepts,” *Perspectives on Emotion (Łódź Studies in Language 20)*. ed. by Paul Wilson, Peter Lang, Frankfurt am Main. (2011) 査読有　印刷中.

②渡辺秀樹「英語史とコロケーション」『これからのコロケーション研究』堀正広編（第4章）ひつじ書房(2011) 査読有　印刷中.

③渡辺秀樹「シェイクスピアにおける賞賛と罵倒のレトリック：動物名人間比喩用法の対義・類義の構造」『言語文化共同研究プロジェクト 2010』大阪大学言語文化研究科 (2011) .1-20.　査読無.

④大森文子「堕天使の変容と感情：*Paradise Lost* におけるメタファーの構造性をめぐって」『文化とレトリック認識（言語文化共同研究プロジェクト 2010）』大阪大学言語文化研究科 (2011) 21-34.　査読無

⑤大森文子「讃美のメタファーの形式と意味：Shakespeare の *Sonnets* における太陽のメタファーをめぐって」『意味と形式のはざま』英宝社.（2011）281-94.　査読有

⑥ Hideki Watanabe, “Grendel’s Approach to Heorot Revisited: Repetition, Equivocation, and Anticipation in *Beowulf* 702b-727” Aspects of the History of English Language and Literature. (2010) Frankfurt: Peter Lang. 187-97.　査読有

⑦渡辺秀樹「名詞 *cat* を含む諺・成句・イディオムと人間比喩義の構造　共同研究　英語動物名のメタファー（10）」『言語の歴史的変化と認知の枠組み　言語文化共同研究プロジェクト 2008』(2009) 大阪大学 5-21.　査読無.

⑧大森文子「イディオムと詩的表現に見られる動物を媒体とした感情メタファー：共同研究　英語動物名のメタファー（11）」『言語の歴史的変化と認知の枠組み　言語文化共同研究プロジェクト 2008』(2009) 大阪大学 23-36.　査読無.

⑨ Hideki Watanabe, “The Ambiguous and Polysemous Compounds in *Beowulf* Revisited: *æshholt* and *garholt*” *Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts* (2008) Peter Lang. 143-55.　査読有.

⑩渡辺秀樹、大森文子「19 世紀英国児童向け動物寓意詩 3 編　テキスト・全訳・語注・動物名人間比喩義対照表・メタファー分析：共同研究　英語動物名のメタファー（9）」『メタファーとスキーマ（言語文化共同研究プロジェクト 2007）』(2008) 5-39. 大阪大学大学院言語文化研究科 査読無.

⑪Ayako Omori, “Emotion as a Huge Mass of Moving Water,” *Metaphor and Symbol*, (2008) vol.23, no.2. 130-146.　査読有.

⑫渡辺秀樹「メディア英語の犬品種名メタファーの構造 *poodle* と *rottweiler* を中心に：共同研究　英語動物名のメタファー(7)」『文化のレトリック言語文化共同研究プロジェクト 2006』 (2007) 31-44.　査読無.

⑬大森文子「メタファーのダイナミクスと視点：*Paradise Lost* の叙事詩的比喩をめぐって」『ことばと視点』pp. 5-19. 英宝社.（2007）査読無.

〔学会発表〕（計６件）
①渡辺秀樹　シンポジウム第 10 部門「*Beowulf* と日本人の研究」企画と総論担当. 日本英文学会　第82回全国大会　於神戸大学　2010 年 5 月 30 日.

②渡辺秀樹　シンポジウム「これからのコロケーション」（堀正広司会）「英語史とコロケーション」（英語動物名比喩義の構造性）担当.日本英語学会　第 27 回大会　於大阪大学 2009 年 11 月 15 日.

③Hideki Watanabe, “The Polysemous and Ambiguous Compounds in *Beowulf* Reconsidered with Special Reference to the Doppelformen Denoting Weapons"　国際英語史学会(The Society of Historical English Language and Linguistics）第 2 回大会　於名古屋大学　2009 年 9 月 9 日.

④. Hideki Watanabe, “Grendel’s Approach to Heorot Revisited: Repetition, Equivocation and Anticipation in *Beowulf* 702b-727” 国際英語史学会（The Society of Historical English Language and Linguistics）第 3 回大会　於広島大学　2009 年 8 月 29 日

⑤渡辺秀樹　シンポジウム「中世英語・英文学を問う」第 1 講師　題目「日本における *Beowulf* 研究史 80 年を振り返る」日本英文学会　第 79 回全国大会　於慶應義塾大学 2008 年 5 月 19 日.

⑥大森文子「感情が形づくる心の風景：“a flood of joy”型メタファー表現に見る写像の特性」日本認知言語学会第 8 回大会（於成蹊大学）2007 年 9 月 23 日.

〔図書〕（計 3 件）
①渡辺秀樹編著『英字新聞で知る日本文化』松柏社 2011. 83 頁

②渡辺秀樹・大森文子・加野まきみ・小塚良孝訳　ダイグナン著『コーパスを活用した認知言語学』(翻訳) 大修館書店. 2010.290 頁

③渡辺秀樹編著『英字新聞で読む日本文化』松柏社 2009. 84 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
渡辺　秀樹（WATANABE HIDEKI）
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：30191787

(2)研究分担者
大森　文子（OMORI AYAKO）
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：70213866